九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

史跡赤木城との関わり

久保，幸一
元紀和町教育長

https://doi.org/10.15017/1523917

出版情報：歴史を歩く時代を歩く ： 服部英雄退職記念誌 ： とことん服部英雄，pp.294-295，2015-03-31．九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：

史跡赤木城との関わり

久保　幸一

一　はじめに

私がはじめて服部先生にお目にかかったのは、紀和町教育委員会に勤めていた頃の平成七年（一九九五）八月でした。赤木城跡の復元に向けて発掘調査委員会が結成され、その委員になっていただき、熊野市紀和町（当時は紀和町）にお見えになった時です。[*服部注1]

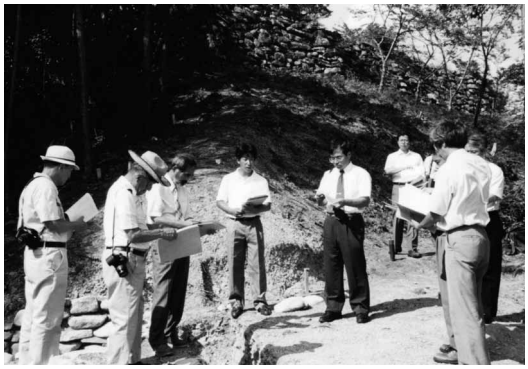
赤木城跡は、天正期城郭の特色を良好に残していることから、平成元年（一九八九）十月に国史跡に指定されました。その当時は、石垣も一部崩落し、樹木に覆われ、城郭の構造も十分につかめていなかったことから、学術調査を実施することによって歴史的・文化的価値を高めるために、紀和町教育委員会が主体となり、三重県教育委員会及び三重県埋蔵文化財センターの協力により、平成七年（一九九五）から平成十九年（二〇〇四）までの九年間に亘る整備事業を行ってきました。

【写真1】国史跡赤木城跡の主郭。

服部先生は文化庁の調査官であったときに赤木城跡の指定作業に従事され、その関係で、継続して委員をお願いしました。委員長は文化庁の審議委員で、服部先生の恩師でもある石井進先生にお願いしました。この間、両先生には公務多忙の中、僻地の紀和町まで何度も足を運んで頂き、専門的な立場から指導助言を頂きました。

長い年月を重ねましたが、遂に目的を達成し、今や「天空の城」とも呼ばれ、多くの城愛好家達や観光客が訪れるようになりました。

二　炎天下の調査



【写真2】炎天下における学術調査。

城跡の整備事業に於ける学術調査は、主に真夏に実施されたので、先生にとっては正に暑さとの勝負であったかと思います。木陰の無い炎天下で、崩落した石垣の現状を調べたり、ある時は雨の中、傘を片手に急斜面を下っての堀切調査。その他、城の構造・建造物の確認、出土遺物の検証等、いろいろ携わって頂きました。更に現地調査の後は、会議室に戻り復元に向けての協議がなされ、詳細な指導助言を頂きながら、今後の方針を決めるに至りました。休憩時間も惜しむことなく、日

暮まで熱心に取り組んで頂いた先生のお姿は、今なお忘れることができません。

三　先生との想い出

私が感じたはじめの先生の印象は「古武士」的で、豪傑肌の方で、何となく近寄り難い思いがいたしましたが、会話を重ねる度に「気さく」で、とても学者とは思えない程の、柔和な人柄に驚かされました。

荒廃した城跡には、不明な箇所が多くあり、私共の愚問に対しても、穏やかな優しい口調で快く答えてくださり、極めて楽しく有意義な時間でありました。

熊野の地を訪れた先生は、近郊農村に於ける民俗的な事象にも関心を持たれたようで、移動中の車窓から見える光景についていろいろ質問され、現地へご案内した記憶があります。例えば、集落の地名やその地に住む人々の生活実態や古民家の屋根上に並べられている石、強風から家屋を守るための石垣壁、廃棄物を燃やす「灰ガマ」等に強い関心を寄せられていたことが印象に残ります。歴史に造詣の深かった委員のひとり、前千雄氏（故人）とも懇意にされていました。

紀和町は古くから鉱山があった地で、熊野地方としては珍しく独特の文化が生じた町でもあっただけに、先生にとっては興味深いものがあったのではなかろうかと思います。

私は、先生の幅広い学識と温かく、飾り気のない人柄に接しながら様々なことを学ぶことができ、心から感謝いたしております。

この度、退任なさる報に接し、大変驚きました。どうかご健康に留意され学研活動に専念されますよう念願いたしております。過ぎし日の先生と共有したひと時を懐かしく想い出しながら、拙文をもってペンを置きます。

（元紀和町教育長）

＊服部注1

三重県紀和町はその後熊野市となった。丸山千枚田があって、黒鍬とよばれる専門集団が石をついた。石井進先生も強く関心を持たれ、棚田学会の創設と、石井先生が会長就任に到る導線になったと推測される。灰への関心は『政基公旅引付』にみえる紺灰座との関係であろうか。